

## 種痘に大野牛

中川五郎治・日本で初めて種痘

わが国種痘術の創始者。青森県の人でエトロフ魚場の番人兼通詞の助役を勤めたが、文化4年(1807)ロシア人に捕らえられてシベリアに送られた。6年間の抑留中、商人の家に泊まり種痘書を貰い受けた。ロシア人医師に種痘法を学んだ。

帰国後、松前藩に仕え文政7年(1824)、松前地方で天然痘が流行した際、五郎治は初めて種痘を行い、その後、数度に及んで実施し多くの人を救った。

オランダの医師が長崎で種痘に成功したのは、嘉永2年(1849)のことで、日本で行われた種痘は五郎治の方が25年も早かった。

五郎治の種痘法は天然痘患者の痘瘡を採って牛に植付け、その痘苗を男子は左腕、女子は右腕に植えた。このとき使われたのが大野牛であった。

(リーフレット「人物」に掲載)

\*江戸後期には南部牛が多く移入され大野付近が一番多かったという。



## 北海道の赤い鳥学校

木村文助・生活綴り方指導

秋田で綴り方教育に専念すると共に村の青少年を対象に冬期間夜学を開設した。

大正6年(1917)、函館師範学校和田喜八郎校長(秋田県出身)の招きで渡道、翌年大野尋常高等小学校訓導兼校長(36歳)となる。同年児童月刊雑誌『赤い鳥』(主宰鈴木三重吉)が発刊され、綴り方を自らも率先指導し投稿する。毎号のように入選し北海道の赤い鳥学校とまでいわれ、鈴木と親交を深める。

昭和2年(1927)、その入選作などと論文も入れて文集『綴り方生活 村の子供』を東京から発刊する。翌年砂原小学校へ転勤、『漁村職業の全貌』を発刊し名声を高め、在勤中大野小を中心とした実践を次々著す。戸井村日新小で当局の干渉により同12年55歳で退職。森町に住む。

同16年札幌昭和中学校で再び教鞭を取り三年間勤め森町へ戻った。

同28年、71歳で亡くなる。

(リーフレット「木村文助」に詳しい)

《「説明板」・本町 資料館》

\*資料は北斗市郷土資料館や森町図書館に保存されている。



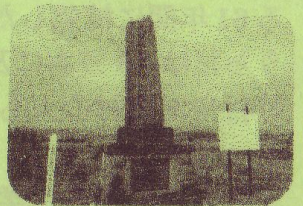
## 大野 いちばん

### 北海道水田発祥の地

野田作右衛門・文月で米収穫

文月の米作歴史で①寛文年間説・②貞享2年説・③元禄5年説の3説がある。

昭和24年(1949)、大野村字村内に建てられた石碑「北海道水田発祥之地」(知事田中敏文書)には、元禄5年(1692)説・「野田作右衛門が、押上の地に450坪を墾田し、10俵の米を収穫した」を採り、碑文は『松前志』の記述や様々の調査、村民の伝承によったものである。



平成20年、「北海道水田発祥の地碑」が北斗市文化財に指定された。周辺整備の声が強まっている。

(各種リーフレット掲載)  
《「説明板」・村内、石碑》

2012年3月

大野文化財保護研究会